



同和問題について、
ご理解いただけたと
思います。

さらに、不動産会社がマンション建設予定地を「買ったがらない人がいる」とか「何か問題があるといけないから一応調べておこう」といった理由で同和地区かどうか調査する事件が起きました。これは「同和地区」そして「被差別部落出身者」を排除することを前提とした部落差別です。

このように発覚するのは、実際に起きている差別事件の氷山の一角であることはいうまでもありません。こうした差別事件や、結婚や就職がだめになる同和問題は決して過去のことではなく、私たちの住む東京で現在でも起きている人権侵害の問題なのです。



「解決のためにはどう
したらいいでしょう」

部落差別は生まれによって身に覚えのないレッテルを貼られることで起こります。そして、このレッテルは「みんながしている」とか、「昔からしている」といったかたちで、差別を受け入れている人や、無知や無関心のままで、問題を正しく理解しようとしなない人がいることによって根強く温存されているのです。

また、被差別部落の人たちが差別されるようになったのは、「ケガレているから」とよくい

われますが、これに対して「ケガレなど存在しないのだから間違っている」と説明できる人がどれだけいるのでしょうか。

私たちは、ふだん肉を食べ、革製品を身につけていますが、これらを作るために必要なと畜（食肉解体処理）業務をする人に対して「ケガレ」や「残酷」を感じるといった矛盾はないのでしょうか。このことは同和問題と深く関わっており、正しい認識と理解が必要です。

私たちは、ふだん何気無く受け入れている迷信や慣習などを、常に問い直す努力が必要です。このような努力の積み重ねが、客観的な視点で物事を見極める習慣をつくりだし、ひいては差別へつながる偏見に気づききっかけとなります。

また、客観的な視点で判断し根拠がないと気づいたことでも、「みんながしている」からといって従ってしまえば、差別とわかっていても「みんながしているから自分だけやめることはできない」といった、差別がなくならない構造を崩すことはできません。正しくないと思ったことは、世間に惑わされることなく従わないといった、毅然とした態度をとれるようにすることが大切です。

ふだん当たり前のように受け入れている言葉や迷信、慣習、世間体といったものすべてが差別につながるわけではありません。しかし、見

つめ直す努力をすることが、私たちの社会から差別をなくしていく道にはなくてはならないものです。

このように、私たち一人ひとりが同和問題の解決を目指し努力することは、偏見を見ぬく力を身につけ、世間体に負けず差別を許さない行動をとることであり、あらゆる差別を解決するための努力でもあるのです。



「同和問題の一つの課題
として「食肉・と場問題」
があります」

食肉は、私たちが生きていくうえで欠かせないものですが、ケガレ意識や食肉・と畜に関しての長い歴史から、食肉市場やそこで働く人に対する強い偏見や差別が残されています。

日本は、仏教の伝来による殺生戒と時の支配者の政策的な食肉禁制によって、長い間、肉食はケガレると考えさせられてきました。誰もが公然と肉を食べられるようになったのは明治に入ってからです。

しかし、食肉禁制・殺生禁断の時代でも、動物の皮は、馬具や武具の生産には欠かせない重要なものでした。そこで、江戸幕府は農耕用や運搬用の牛や馬が死んだときに、その処理を「ケガレた仕事」として被差別部落の人達にしか従事できないものとして担わせ、貴重な

皮を独占することができたといわれています。

明治になって食肉禁制がなくなり、だんだんと食肉文化が普及し、と場が全国各地に増えていきました。このような中、被差別部落の人達を中心となって伝統的な技術を伝え、部落産業の一つとして食肉産業を支えてきたのです。

被差別部落がと畜業務・食肉産業と深くかかわってきたことから、現在もさまざまな問題が起こっていますが、単なる職業に対する差別という次元の問題ではなく、根本に同和問題の存在があるため、解決が遅れているといえます。

と場で働いている、働いていた、あるいは親せきが働いているというだけで被差別部落出身として就職を拒否されたり、結婚に反対される人権侵害も起きています。

私たちの社会では、ふだん肉を食べ革製品を身につけています。その生産過程で働く人を差別したりと場を忌み嫌うことは、矛盾した許されない行為です。この「許されない行為」にも同和問題との関わりの中で「うなずいてしまう」人が決して少なくないことは、残念なことです。

と畜業務は、私たちが生活するために必要な生き物の命を、高度な技術を活かしてくれている仕事です。こうした偏見や差別の実態をなくしていくためにも、同和問題の解決が必要なのです。